



詩味礼讃

好詩家たちの対話 ②

ナビゲーター マーサ・ナカムラ
ゲスト 布施琳太郎

布施 現代詩文庫の『小笠原鳥類詩集』（思潮社）です。マーサ 対談に先立って布施さんの書いた詩を読ませていただきましたが（62ページ参照）、詩を書き始めたのはいつごろなんですか？

布施 二十歳くらいですね。どのような作品をつくるかを考えるときに、作家によってはスケッチを描くことがあるのですが、僕はスケッチで思考を出力できるほうではなかったので、言葉で考えをめぐらせていたんです。その際、自分の思考と向き合うために自己を他者化しようとして思いついたのが、詩という手法でした。マーサさんが詩を書いているときは、書く主体が自分から離れたり、自分ではない誰かが書き手として感じられたりすることはありますか？

マーサ 書き手の主体が自分から飛ぶことは、よくあります。ただ、食べものの味や足で触った砂の感触といった、ある種の感覚は共有していて、だから自分以外の人格にも乗り移って書けるかなと思います。私の場合、まず映像が頭のなかにあって、そこから詩を書いていくことが多いのですが、布施さんは詩から作品が生まれるパターンが多い感じですか？

布施 詩のように書いた言葉によって、まだイメージ

詩人のマーサ・ナカムラさんとゲストとの歓談を通じて、詩の味わいや、味わい方の多様さを探っていくという連載「詩味礼讃 好詩家たちの対話」。第二回は、アーティストの布施琳太郎さんをお迎えしました。

詩だからできるコミュニケーション

マーサ 今回の対談に布施さんをお呼びしたのは、布施さんがアーティストとして現代美術の世界で活躍されていることも理由の一つですが、以前、「いまアートをやっている人は、けっこう詩を読みますよ」といったお話をされていて、すごく気になっていました。ただ、『現代詩手帖』に寄稿されているエッセイを読むと、布施さんが詩を読むようになったきっかけは、全然アートと関係ないんですね。十代のころ、好きな人がツイッターに「ほしい物リスト」を公開していて、そのなかにあった詩集を、彼女にプレゼントするでもなく、こっそり買って読んでいたそう（笑）。そのとき手に取った詩集というのは？

しきれない作品の世界に連れて行ってもらっているという感覚が強いですね。

マーサ 布施さんの作品については、ご自身のウェブページでいろいろと見られるようになっていますが、そういうえば、あの中に猪を解体する映像がありますよね。ほかの作品には解説がついているのに、あの映像には一言もなく、「なんだこりゃ!？」と思いました。**布施** あの動画は作品というよりも、解体そのものの興味から撮影したものです。でも、あの映像に刺激されて、その後の自分の考え方が固まったところがあるんです。美大時代は油絵科で、油絵を描く際にモチーフを観察するというのは目で見ることだったので、猪の解体では目だけではなく手でも見ているというか、手を使って見つけた筋と筋や骨と肉の間を刃物が通過するというかたちで、対象と解体者がコミュニケーションしているように見えたんです。それから、先史時代に洞窟壁画を描いたような人々にとつての観察も、目ではなく手で見る観察だったのかなと考えるようになったりしました。

マーサ 以前、コラボ展示のお話をいただいたときに、展示方法についての話の中で、「マーサさんの作品を

ふせ・りんたろう●1994年東京都生まれ。映像や絵画を使用したインスタレーション制作のほか、文筆活動、展示会の企画なども行う。同世代のアーティストや詩人、研究者などとも幅広く協働している。

まーさ・なかむら●1990年埼玉県生まれ。第54回現代詩手帖賞、『狸の匣』（思潮社）で第23回中原中也賞、『雨をよぶ灯台』（思潮社）で第28回萩原朔太郎賞を受賞。